

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32672

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26870168

研究課題名(和文)近代日本音楽史のメディア論的変容に関する社会史的研究 「未熟さ」の視点から

研究課題名(英文)The Social History of the Media and Music in Modern Japan: The Aspect of "Immaturity"

研究代表者

周東 美材 (SHUTO, Yoshiki)

日本体育大学・体育学部・准教授

研究者番号：80725226

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、メディア技術と近代家族とが結びつき、「未熟さ」を価値の準拠点としてナショナルな自己イメージを産出していくという構造に注目した。こうしたメディア技術と近代家族の構造的関係の歴史的淵源は、1920年代前後の近代日本の社会変動にあった。日本の近代家族が姿を現していったのはこの時期であり、彼らは本格化する消費社会の主人公となって、新たなメディア技術の社会的需要を方向付けるようになった。童謡、松竹少女歌劇、ジャニーズ、「スター誕生！」等をめぐる各種の「未熟さ」の文化を仔細に検討することで、そのようなメディア技術と近代家族の構造的関係を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：I focus on the production of a national self-image based on the value of "immaturity," and in which media technology and the modern family are linked together. The historical origins of this structural relationship between media technology and the modern family originates in social changes in modern Japan of around the 1920s. This period was when the Japanese modern family first appeared, becoming the main players in Japan's burgeoning consumer society, and setting the direction for how the new media technology would be socially received.

研究分野：社会学

キーワード：文化社会学 芸術諸学 メディア 大衆文化 ポピュラー音楽 家庭 子ども文化

1. 研究開始当初の背景

従来の西洋音楽の受容に関する研究は、幕末から明治期を主な対象とし、西洋音楽による音楽文化の近代化や制度化の問題を扱ってきた。だが、20世紀以降の音楽文化は、大衆化という新しい局面を迎えた。これにより、芸術音楽を含めたほとんどすべての音楽が、大量複製技術というメディアの作用を抜きには考えられなくなっていく。

20世紀初頭のレコード・ラジオ・映画といったメディア技術は、世界の各地で階級、人種、エスニシティ、ジェンダーをめぐる価値意識と関わり合いながら、「国民的」と呼ばれることになるような新たな音楽ジャンルや楽曲を生成していった。ジャズやタンゴ、《アリラン》などは、そうした社会的な価値意識とメディア・テクノロジーの交差の中で生み出されていった音楽だった。

日本社会の場合には、三越少年音楽隊、宝塚少女歌劇、お伽歌劇、童謡等というように、日本独自の「子ども」の音楽が、新聞・雑誌・レコード・ラジオ・鉄道といったメディア技術との関係の中で生成していた。日本においては、「子ども」という価値意識を通じて西洋音楽が受容され、大衆化していったことが推測される。そこで、本研究は、こうした「子ども」に関わる価値意識とメディア技術の変容との関係に注目しながら、現代に至るまでのメディアと音楽の産業的・文化的構造の解明を目指すこととした。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本社会における音楽の大衆化の問題に関して、「未熟さ」という視点を導入することで社会的に明らかにし、メディア技術と西洋音楽の社会的受容についての総合的・包括的に理解することを目的としている。本研究の達成により、近代日本における西洋音楽の受容の特異性を歴史的に明らかにし、「未熟さ」と融合した大衆メディア文化が生成していった日本の歴史的・文化的条件についてグローバルな視点から明らかにすることを目指す。

次に、本研究で得た成果を通じて、文化産業や文化政策をめぐる現状に対して、学術的見地から提言をしていくことも目指す。昨今の日本社会では、いわゆる「カワイイ」と呼ばれるメディア文化が社会現象化している。「カワイイ」と呼ばれるメディア文化は、(1)産業的流行、(2)公的性格、(3)文化ジャンルの影響の越境性、(4)ナショナルな記号性や自己意識という側面を有している。第1に、アイドル、アニメ、マンガ、ゲームといったコンテンツは、メディア産業の主力な商品となっている。第2に、これらは文化政策の主要対象として認知されており、ゆるキャラ(官公庁)や「きゃりーぱみゅぱみゅ(渋谷区)等は、巨額の公的資金が投入されている。第3に、日本のメディア文化において、多様な

表現ジャンルにおいて、「未熟さ」に特徴づけられた創作活動が行われ、例えば「ボーカロイド」は一般のアマチュア・ユーザーから富田勲のような芸術家までを魅了している。第4に、これらの「カワイイ」文化が、海外に発信される際には、ほとんどの場合「日本」という冠詞が付される。以上を鑑みると、「未熟さ」は、もはや趣味や娯楽の範疇を超えた、社会的性格を強く帯びた文化的問題であると言わざるを得ない。本研究は、この問題を単なる趣味的な印象批評ではなく社会史的側面から捉え、コンテンツ産業や文化政策の現状に学術的提言を行う。

3. 研究の方法

本研究では、主要なメディア技術・産業の変容に着目しつつ、次の4つの時代区分を設ける。

- 第Ⅰ期：レコード・ラジオの普及(1910年代～20年代)
- 第Ⅱ期：米軍基地の展開からテレビ放送の開始(1945年～50年代初頭)
- 第Ⅲ期：テレビ全盛期(1970年代)
- 第Ⅳ期：インターネット時代(2000年代～10年頃)

以上の各時期区分において、メディア環境が社会的に変容していく中で、どのような文化的な素地や条件が要因として作用したのかを考察し、また、そこからどのような音楽文化が形成され、それが構造的に安定化していったのかを解明する。

4. 研究成果

(1)総括的研究ならびに理論的研究の成果

本研究の問題構成の全体像を明らかにするため、まず、初年度に、総括的研究として論文「『未熟さ』の系譜——日本のポピュラー音楽と1920年代の社会変動」をせりか書房より発表し、1970年代までの日本のメディアと音楽の産業的・文化的構造に関する考察を行った。とりわけ、家庭でのメディア使用(メディアのドメスティケーション)のプロセスに注目し、近代家族と近代的な子ども観の形成が、音楽の産業・文化に及ぼした影響について考察した。また、この論考については、最終年度に、公益財団法人サントリー文化財団主催の「『知』の試み研究会」において成果報告書「『未熟さ』とメディアの社会史——1920～70年代日本における音楽文化の変容を主題として」を発表し、初年次の考察に再度検討を加え、4年間の成果を総括した。

また、理論的研究として論文「文化社会学の生成——土田杏村の機械論と聖なる価値意識の転回」を日本図書センターより発表し、近代日本における「子ども」や「未熟さ」を

めぐる価値意識の形成について、メディア論と社会変動論の見地から考察した。

(2)「第Ⅰ期」に関する研究成果

「研究の方法」に記した時代区分のうち、第Ⅰ期に関する研究成果を、次の通り発表していった。まず、単著『童謡の近代　メディアの変容と子ども文化』を岩波書店より刊行し、子どもの音楽とメディアの関係を1920年代前後の時代状況に即しながら詳細に明らかにしていった。本成果は、第40回日本児童文学学会奨励賞を受賞、また、一般社団法人日本童謡協会の第46回日本童謡賞特別賞を受賞した。次に、本成果をより多くの読者に向けて公開するために公益財団法人鳥取童謡・おもちゃ館より、論文「音楽化する童謡」を発表し、単著の内容を一般向けに整理し直した。

さらに、同時代の他の研究事例として、少女歌劇に注目し、論文「子ども」という自画像　水の江瀧子からみる1930年代の国家意識」を学習院大学東洋文化研究所にて発表した。本論文では、戦前の松竹少女歌劇のレビュースター水の江瀧子の身体表象や「未熟さ」をめぐる、いかにナショナルな自己意識が形成されていったのかについて考察した。本論文は、学習院大学による査読と出版助成を受け、勁草書房から刊行されることが決定している。

(3)「第Ⅱ期」に関する研究成果

第Ⅱ期に関する研究成果としては、論文「いつも見ていた「ジャニーズ」　戦後日本のメディアと家族」を、サントリー文化財団の『アステイオン』にて発表した。ワシントンハイツから生まれたジャニーズ事務所の設立経緯などを考察することで、占領政策とテレビ芸能界との関係という、戦後日本のメディア再編の一端を明らかにした。本論文では、戦後日本のニューメディアの導入・誕生について考察したが、他方では、戦前から戦後への連続性についても考察した。

論文「水の江瀧子と石原裕次郎　「男であること」の捏造の系譜」がその成果である。この論文では、第Ⅰ期の少女歌劇における文化資本・社会関係資本の蓄積が、戦後の映画界の中で転用され、新たな映像表現を生み出していったことについて考察した。また、これらふたつの事例を通じて、「未熟さ」という価値意識に基づいて新たなメディア文化が生成していくこと、さらには、そこにナショナルなアイデンティティが見出されていく可能性について批判的に考察した。

(4)第Ⅲ期に関する研究成果

第Ⅲ期に関する研究成果としては、論文「子ども文化としての「スター誕生！」　1970年代のテレビと阿久悠の試み」を発表した。本論文が考察の範囲としている1970年代とは、テレビがほぼ全世界に普及し、視聴

覚情報に媒介されたイメージによって日常性や欲望が生み出される消費社会が本格的に台頭していった時代であった。こうした時代において、テレビ番組「スター誕生！」は、テレビの中でスターを生み出し、熱狂のシナリオを演出していった。こうしたシナリオを描いたのは日本テレビのスタッフと作詞家の阿久悠であったが、本論文では彼らの演出手法を「子ども」や「未熟さ」をめぐる意識の側面から分析した。

本論文に関連して、論考「音楽文化としての甲子園　「未熟さ」のパフォーマンス」を公益財団法人音楽文化創造が発行する『音楽文化の創造』に発表した。この小論では、高校野球と阿久悠の關係に注目し、「スター誕生！」の演出法を分析した。また、あわせて高校野球と、戦前の阪急や宝塚少女歌劇との關係を考慮に入れ、第Ⅲ期と第Ⅰ期との連続性／切断を考察するための手掛かりを得た。

(5)第Ⅳ期に関する研究成果

第Ⅳ期に関する研究成果としては、共著『カワイイ文化とテクノロジーの隠れた關係』を東京電機大学出版局より出版した。本書は、社会情報学、感性工学、シミュレーション&ゲーミング研究、ヒューマンインタフェース研究、VR研究など、テクノロジーと社会との相互關係に関する文理融合の学際的共同研究の成果である。本書の一部を担当することで、21世紀における世界的な技術革新と、日本における「未熟さ」をめぐる価値意識の關係を歴史的に相対化する視座を提示した。本書は、2016年日本感性工学会出版賞を受賞することができた。

(6)研究成果の国際的な発信

前述の論文「いつも見ていた「ジャニーズ」　戦後日本のメディアと家族」の成果を基に英語論文「The “Johnny’s” Entertainers Omnipresent on Japanese TV: Postwar Media and the Postwar Family」を執筆した。本論文は、外務省の委託事業によって運営されている日本の外交専門ウェブ誌『Discuss Japan (Japan Foreign Policy Forum)』に掲載された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

周東 美材、水の江瀧子と石原裕次郎「男であること」の捏造の系譜、『東京音楽大学研究紀要』、査読無、第41集、2018、57-74

周東 美材、童謡の音楽化、『わらべ館童謡・唱歌研究情報誌音夢』、査読無、第12号、2018、2-15

周東 美材、The “ Johnny ’s ” Entertainers Omnipresent on Japanese TV: Postwar Media and the Postwar Family、『Discuss Japan (Japan Foreign Policy Forum)』、査読無、No.42、2017、
<http://www.japanpolicyforum.jp/archives/culture/pt20171219165302.html>

周東 美材、いつも見ていた「ジャニーズ」戦後日本のメディアと家族、『アステイオン』、査読無、85号、2016、178-192

周東 美材、子ども文化としての「スター誕生！」 1970年代のテレビと阿久悠の試み、『東京音楽大学研究紀要』、査読無、第39集、2016、67-87

周東 美材、音楽文化としての甲子園「未熟さ」のパフォーマンス、『音楽文化の創造』、査読無、第73号、2015、11-15

〔学会発表〕(計4件)

周東 美材、少女歌手の産業化 童謡を事例として、国際日本文化研究センター機関拠点型機関研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」、2016年10月13日

周東 美材、複製技術と歌う身体、日本感性工学会、2016年5月21日

周東 美材、童謡と1920年代のメディア変容 「読む」ことと「歌う」ことのあいだをめぐって、日本音楽学会、2015年11月14日

遠藤 薫、大倉 典子、出口 弘、周東 美材、「カワイイ」文化は新技術・新産業を創出するか、横幹連合総合シンポジウム「日本発モノ・コト・文化の新結合」、2014年11月30日

〔図書〕(計4件)

周東 美材、複製技術と歌う身体 子ども文化から見た近代日本のメディア変容、横幹 知の統合 シリーズ編集委員会編『カワイイ文化とテクノロジーの隠れた関係』、東京電機大学出版局、2016、118頁(77頁~89頁)

周東 美材、『童謡の近代 メディアの変容と子ども文化』、岩波書店、2015、296頁

周東 美材、文化社会学の生成 土田杏村の機械論と聖なる価値意識の転回、吉見俊哉編著『文化社会学の条件 20世紀日本における知識人と大衆』、日本図書センター、

2014、284頁(71頁~109頁)

周東 美材、「未熟さ」の系譜 日本のポピュラー音楽と1920年代の社会変動、東谷護編著『ポピュラー音楽から問う 日本文化再考』、せりか書房、2014、293頁(135頁~179頁)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

周東 美材 (SHUTO, Yoshiki)
日本体育大学・体育学部・准教授
研究者番号：80725226

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()